

◆書評 3◆

犬になるということ*

Some reflections on becoming a dog

伊東 剛史
ITO TAKASHI

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

犬 狗類学 擬人化 動物 アニマル・スタディーズ

Keywords

Dog; canisology; anthropomorphism; animal; animal studies

原稿受理日: 2020.1.31.

Quadrante, No.22 (2020), pp.129-132.

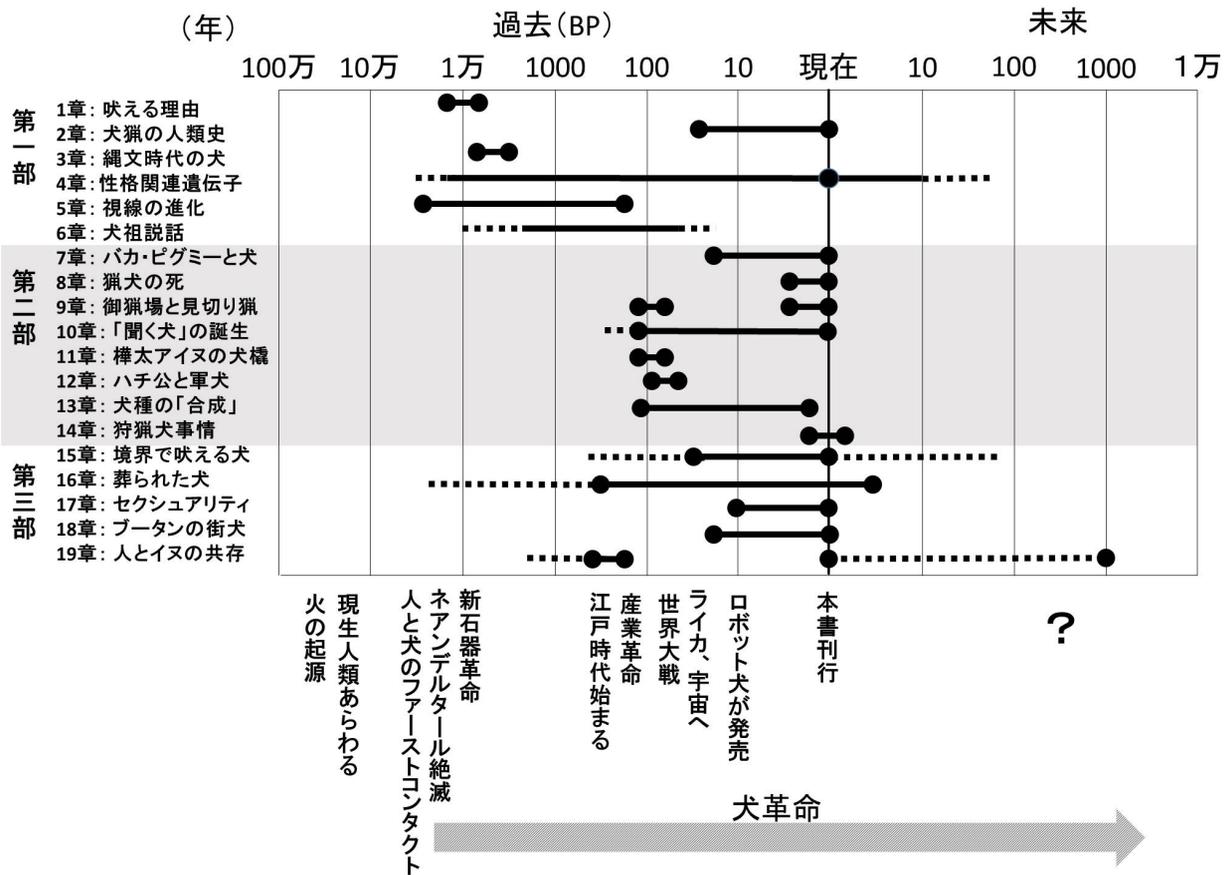
『犬からみた人類史』の扱うテーマは多彩である。執筆者のバックグラウンドも実に多様である。しかし、編者はいくつかの工夫を凝らすことで、多様性の中に一体性を生み出している。工夫のひとつは、時間の流れに沿った3部構成である。序章8頁の図1(次頁、図1)が示すように、過去、現在、未来という時系列に沿って、各章が配置されている。この時系列が横軸であれば、そこに「トレーニング」、「犬を飼うコスト」、「犬の死」という3つの分析的なキーワードが縦軸として交錯する。それにより、各章の間にニュアンスに富む重層的な関係が生まれ、議論が深まる。さらに、「『犬も歩けば棒に当たる』ように気の向くままにどこから読んでもよい」という親切な案内もなされている(本書7頁)。せっかくなので、評者はその案内に従ってみた。最後にある19章を最初に読み、その後は、目次やクロスレファレンスに導かれるまま、自由に読み進めていった。

すると今まで犬について考えてもみなかった

ような、「イヌはいつ吠えるようになったのか?」、「そもそも日本犬とは何なのか?」、「飼犬でも野犬でもない犬はいるのか?」、「犬が性愛の対象になるとはどういうことなのか?」といった問いに導かれ、『犬からみた人類史』を探索するフィールドワーカーになったかのような読書になった。そして一通り読み終わると、実験科学、実証研究、実存主義(書き手の主体性や立場性が示され、読み手にも主体的関与を要請するもの)のバランスの良さに感服した。近年は、文理協働/融合が唱えられているが、実際に多彩なバックグラウンドをもった人々の共同研究は、なかなか難しい。評者自身も、痛みをテーマに、文学、思想史、宗教社会学、神経内科学、漢方医学の研究者と、研究会を重ねてきたが、知識の交換や議論そのものは面白くても、その成果をひとつのかたちにして世に送り出す困難に直面した。もちろん、本書がそうした問題を回避して、予定調和のようにまとめられたと言うつもりはない。第19章の「犬になって語る」という方法については、著

* 評者の依頼がコメント内容の活字化も含めた依頼だったため、書評会では予め書評形式の原稿を用意して、それを読むという方法をとった。本稿は、その原稿に加筆修正を施したものである。このような経緯から、本特集の他の寄稿と異なり、敬称略となっていることをご容赦願いたい。





【図1】「イヌ革命の時間枠組みのなかでの本書各論文の配置。横軸は現在から過去・未来それぞれへの時間的な距離を対数年数で表している。実線（論文中で年代が明示されている場合）と破線（論文中では明示されていない場合で、編者による推定を含む）で、本書に所収の各章の論文がおもにあつたおおよその時代を示した」（本書序章8頁の図1を抜粋）。

者のあいだに意見の相違があり、突き詰めた議論のあったことが窺える（本書21頁、注4）。「犬を理解すること」、「犬と共存すること」には、様々なアプローチがある。繰り返しになるが、その多様性を包み込む、大きな統一性が本書にはある。そして何より、索引やクロスレファレンス、ウェブサイトの用語集が充実している。本書に触発されて自らフィールドワークに出ようとする読者の心強い伴侶となる。

こうして本書は巧妙に読者を「狗類学」へと誘う。「狗類学」とは、編者のひとりである池田によれば、「人間←→犬（狗）の存在論的置換のためのレッスンをおこなうこと」だという。「存在論的置換」を実践するには、パースペクティヴィズム（犬の視点から見てみる）と擬人法（犬に人間的性格をあたえる）が鍵になる。まずは「犬になろうと想像力を働かせること」（本書4頁）から始まる。それを最も先鋭

化したのが、「俺は犬だ」と吠える池田（19章）の独白になるだろう。あるいは、眠りながら尻尾を振る飼犬の姿に、自分と遊んでいる夢を見ているのだろうと夢想する菅原（15章）のように、犬と人の視点が混じり合い、溶け合ってしまうのも、擬人法のもうひとつの帰結かもしれない。

しかし、上記の犬の独白は、「犬に人間的性格をあたえる」というより、書き手である池田の個性が犬に憑依したかのようにも読める。つまり、犬に人間的性格をあたえた池田の個性が露わになるからである。動物を人に擬える（anthropomorphism）人の視点の方が強く印象づけられる。その理由のひとつは、「俺たちはイヌではなく、犬様なのだ!」という「雄弁なメッセージ」にある。その雄弁さは、独白する犬の個性を際立たせる。そして、この場の人と犬の存在論的置換を「池田：人」と「池

田：犬」ととの間で完結させる。つまり、その後のゲリラ兵の比喩（本書450頁）にもあるように、互いに相手のことしか目に映らない状態である。その閉ざされた世界では、「人」と「犬」の融合個体である池田のみが存在し、読者は身の置き場所を想像できず、戸惑うことになる。

そうなる理由は、存在論的置換において、想像された犬の視点が常に人へと引き戻されることにある。しかし、人にとって犬との関係は、どれほど重要であっても人の営みの全体の一部に過ぎない。犬にとっても、人との関係が犬の営みの全てを占めるわけではない。犬同士の関係、他の動物との関係、環境との関係もあるだろう。したがって、「犬になろうと想像力を働かせること」は、犬の視点を人へと反転させるだけでなく、人以外にも向けることを含めてよいのではないだろうか。そのためには、動物を人に擬える擬人法（anthropomorphism）に対して、人を動物に擬える、すなわち動物に特有の性格・能力を人にあたえる擬獣法（zoomorphism）を想定してもよいのではないだろうか。人を動物に擬えることもまた、擬人法と同様に、古くから存在する。鳥になって空を羽ばたき、大地を見下ろせば、人以外のものも目に映り込むだろう。犬になって強力な嗅覚を身につけたら、視覚に頼る人とは異なる方法で、時間と空間を把握するだろう¹。このように〈犬の擬人化〉と〈人の擬犬化〉とを往還することで、犬と人との関係をめぐる思索を両者の間に閉じ込めるのではなく、両者を取り巻く世界へと開き、そこに接続されたものとして理解することができるのではないだろうか。

このように犬と人との関係を、世界の連環の中で考えると、改めてなぜ「猫からみた人類史」ではなく、「犬からみた人類史」なのか、ある

いは、なぜその存在論的価値において犬が特権化されるのかを考える意味が生じる。例えば、本書序論では犬をとりあげる理由のひとつに、「イヌは人の生活に深く入り込むだけでなく、認知的にも影響を及ぼしあうまでの仲となっている」ことがあげられる（本書5頁）。これに関して、犬が人の個体を識別すること、すなわち人を記憶することを、さらに掘り下げてみてはどうだろうか。なぜなら、人が犬の個体識別が可能であるように、犬も人の個体識別が可能だという前提のもと、犬と人に等価的な存在論的置換が可能になるからである。「三年の恩を三日で忘れる」と言われる猫では、そのような前提を認めることが難しい。7章で紹介されるバカ・ピグミーの老女による老犬のケアの例では、老犬はカモシカやカワイノシシを狩った若かりし頃の大活躍を覚えているかのようである。老女と老犬の関係が、互いの記憶を保持するという前提があるからこそ、両者の間に堆積する時間が、いわばこの二者が共有する「自分史」をつくり出した。個と個が歴史を共有するには、両者の間に積み重ねられる経験が物語として意味を持たなくてはならない。もちろん、ハチ公を扱った12章のようにイヌの記憶能力の問題を、犬の文化的表象の議論へと展開するのは重要だろう。その一方で、今日の脳神経科学から、犬の記憶能力に迫る議論があっても面白かっただろう。犬はなぜ吠えるのか、眼を通じて人とどのように情報を伝達するのかといった議論とあわせて、種としての人と犬の関係だけでなく、互いに個としての人と犬の関係を、さらに深く考える一助になったのではないだろうか。

このことを科学史の観点から考えれば、犬の記憶能力をめぐる研究が、実際の事例やその伝聞、記録に促されて進展したプロセス、そし

¹ 旭山動物園の園長を務めた小菅政夫によれば、自身を動物に擬えて考えることが、旭山動物園の動物展示のコンセプトである「行動展示」の根本にある。その代表例であるペンギン館の「空飛ぶペンギン」という展示コンセプトも、鳥のように翼を広げて空を自由に空を飛ばたいという人の夢を、ペンギンに仮託したものである。Takashi Ito, 'Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo', in Tracy McDonald and Daniel Vandermommers (eds), *Zoo Studies: A New Humanities* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 2019) pp.237-261.

犬になるということ

てその成果が俗説を肯定、否定、修正しながら研究の展開にどう寄与したのかも重要なテーマとなる。自然科学による理解と文化的表象の構築との相互作用を探究し、いかにイヌと狗とを架橋するかという課題に挑むのも面白い。

最後に境界線の問題に言及し、締め括りた。近藤（10章）は、内陸アラスカにおいて、なぜ犬に話しかけることが禁忌だったのかを分析した。そして、その理由として、人と犬があまりにも近い存在であったために、両者を隔てる禁忌が必要だったのだと論じた。このことは人と犬の共生とは何かについて、大きな示唆を含んでいる。近藤は、「あまりにも似ているがゆえに分離せねばならない者たちの境界が不断の実践を通して保たれることで『ともに生きる』ことがはじめて可能になる」（本書250頁）と言う。この考察をひっくり返すと、近年は逆に両者の間の境界が固定されたからこそ、境界を流動的、越境可能なものと理解し、「境界侵犯」を起こす事例が理想的な分析材料になったということにもなる。とはいえ、人類史の非常に長い時間的変化において、人と犬の間の境界が明示的、安定的、固定的になったと考えるのは早計だろう。やはり、「現代において、犬と人の境界がますます分からなくなってきていること」（本書20頁）は、本書が紹介する様々な事例からも明らかである。犬に対する人の態度、そしておそらく人に対する犬の（想像上の）態度と同様に、人と犬との間の境界もまた、アンビバレンスを含むと理解すべきだろう。

さらに、人と犬のそれぞれの「内部」に引かれる境界線にも、十分注意を払わなければならない²。育種による犬種の分節化（13章）やセクシャル・マイノリティとしての動物性愛

者（17章）といった具体的問題は、犬と人それぞれの集団内に境界線が引かれることを示している。もとより、人と犬は共生すべきという命題や、それはいかに達成可能かという課題は、異なる立場の人々の間に新たな境界線を引いていく。たとえば、1870年代以降のイギリスにおける生体解剖反対運動や、今日の商業捕鯨再開問題のように、動物権（動物の権利）の議論や活動家の諸実践は、人々の間に賛否を生み出し、複数の境界線を引いてきた³。本書には動物権の立場からの論考は収められていない。動物権の観点の不在は、むしろ狗類学と動物権論との間にある境界の存在を示しているということなのだろうか。

ところで、本書には世間一般でよく見られる、犬を人の幼児のように扱う態度への忌避が通底しているように見受けられた。このことは、本書に登場する人がほとんど成人という事実と関係するのだろうか。子どもという存在（生物学的な意味でも、比喩的用法の意味においても）を正面から取り上げた章がないことは、やや不思議である⁴。動物権や子どもの視点の不在は、それらの視点が本書のアプローチに適應できるのかという疑問をもたらす。たとえば、犬を人との関係性においてではなく、犬自身の道徳的地位において規定する動物権の立場（したがって、人は犬とどのような言葉で対話したらよいかという戸惑いは生じない）は、狗類学と共生しうるだろうか。ダナ・ハラウェイの言う「意味ある他者」としての犬と共生することと、犬を「かわいい化（cutification）」することとは本質的に相容れないことなのだろうか⁵。『犬からみた人類史』は、犬をめぐる他の立場性をいかに想定し、それとどのように向き合っていくのだろうか。

² 菅原和孝『動物の境界—現象学から展成の自然誌へ』（弘文堂、2017年）15頁。

³ 伊東剛史「観察—ダーウィンとゾウの涙」伊東剛史、後藤はる美『痛みと感情のイギリス史』（東京外国語大学出版会、2017年）215-259頁。

⁴ 一方、編者のひとりである大石は、別稿において子どものスケッチを用いて、人とゴリラの境界性に対する子どもの認知を考察している。大石高典『人間ゴリラ』と『ゴリラ人間』奥野克巳他（編）『人と動物の人類学』（春風社、2012年）114-115頁。

⁵ Joshua Paul Dale, et al. (eds), *The Aesthetics and Affects of Cuteness* (New York: Routledge, 2016) pp.254-255.